

# いい音楽教育へのアプローチ

—— 教育実習生の指導を通して ——

戎 谷 和 修  
(附属光中学校)

The Approach to the Music Education

—— through the guidance of student teacher ——

Ebisutani Kazunobu  
(Received November 19. 1993)

キーワード：教育実習、教材解釈、発問の構想、授業展開での働きかけ

## 1 はじめに

今年も、教育実習生が教師になろうという夢をもって教育実習にやって来た。しかし、彼女達は次のような状態であり、多くの克服すべき課題をもっている。

- ・ ピアノや歌の演奏能力が趣味程度である。したがって、どの学級にも彼女たちより、上手に音楽的にピアノ伴奏や指揮ができる生徒がいる。歌って聞かせることによって生徒の心をとらえることができるほど歌も上手ではない。
- ・ 自分の力で作品を分析する力がない。したがって、教科書の作品の魅力を十分に感じとることができない。もちろん、魅力の秘密を音楽の特性と結びつけて考えることもできない。
- ・ 物事を論理的に考えた経験が少ないために文章力がない。したがって、レベルの違う言葉を並列的に並べたり、主語と述語が合わない文章を書いたりしてしまう。
- ・ 教育学部の学生として知っていてほしい教育や教育実践に関するキーワードや音楽科の学生として当然修得すべき技術をもっていない。また、興味がない。など。

実習生自身も「音楽科なのに歌もピアノもあまり上手でなく、準備もしないまま・・・」と、「教育実習を始めるにあたって」というレポートに書くなど、自信をもっていない。

彼女達にも、将来、我々音楽の教員の仲間となって活躍してほしいと願う。自分の力で、

赴任した学校の音楽教育を自信をもって実践できるようになってほしいと願う。

私は、その出発点となる教育実習は、一人前の教師として将来一人立ちできるように、次のような点に配慮しながら、あせらず指導することが大切だと考える。

- ・教材の分析・鑑賞など、音楽へのアプローチの仕方を教え、体験をさせることを通して、自分の力で楽譜を読んだり、曲想を考えたりできるきっかけをつくる。
- ・生徒を動かす指導の技術を習得させ、「さすが教育学部出身だ。生徒の扱い方が上手だ。」など、教育学部出身ならではの指導法を習得させ自信をつけさせる。
- ・文章を書くことのむずかしさや書くことによってわかってくる教材や音楽に対する理解力の不足を実感させることによって、文章を推敲する習慣を習得させる。

教育実習生に指導する事項は、音楽科の授業をより良いものにするための基本的事項そのものである。この論文を、音楽教育に対する再認識と教育実習の効果的運営の一つのステップにしてゆきたい。

## 2 指導案をつくる

### (1) 教材と教科内容の区別、教科内容の教材化、教材の分析の仕方を教える

最初の出会いである7月10日の事前実習で、教材と教科内容の区別、教材解釈の大切さ、教科内容を教材化する2つの方法、教材の分析の仕方を、様々な例を用いながら次のように説明した。そして、10月1日の教育実習開始日には、実習する6つの教材の魅力を調べてくるという課題を出した。

実習生に説明した事項を次に説明する。

#### ・ 教科内容と教材の区別

授業には教えなければならない教科内容がある。「歌詞の内容を感じ取って、表現を工夫すること」や「反復、変化、対照による楽曲の構成、声や楽器の音色及びその組み合わせによる響きと効果を理解して聴くこと」など、学習指導要領に載っている事項などがこれにあたる。教科内容は、一般には、生徒が習得していくことが期待されている自然・社会・人間に関してこれまで科学や芸術がつくりあげてきた概念、法則、態度といったものである。それは、生徒にとってはまだ未知のものであり、彼らにはまだ「見えないもの」である。「見えないもの」(教科内容)を「見えるもの」(教材)にして、生徒に提示しなければならない。

吉本均氏は、このことについて、『「見えない」教科内容を生徒に直接教えることはできない。教科内容は子どもにとって「見える」具体的な素材を媒介にしてしか習得させることはできない。そうした素材を、われわれは教材と呼ぶのである』と、述べられている。

教科書の作品、任意に教師が選んだ作品、作品の背景などの資料、CD、LD、様々な楽器、自作の作品など様々なものが教材として使用できる。

・ 教科内容の教材化

教師は、教科内容を生徒の実態（興味・関心・意欲・演奏技術・知識・理解など）に照らして、生徒にとって「見える」具体的な素材を媒介にして習得させなければならない。具体的な素材を媒介にすること、教科内容の教材化の2通りの方法を、次のように実習生に説明した。

一つは、『「歌詞の内容を感じ取って、表現を工夫すること」という教科内容をもとに、教材として「荒城の月」を選択し、歌詞の内容を生徒に感じとらせ、深い豊かな声で歌詞の抑揚に気をつけさせながら合唱させる』といった方法である。「反復、変化、対照による楽曲の構成、声や楽器の音色及びその組み合わせによる響きと効果を理解して聴くこと」という教科内容をもとに「運命」を選び、冒頭の動機が曲全体でどのように使われているか、また、同じ動機が曲の進展とともに、どのような変化や影響を作品にもたらしているかなどを、生徒に追究させたりする方法もこれにあたる。

また、一つは、教材をつくり、生徒に、自由な発想による即興的な表現や創作をさせるといった方法である。例えば、次の教材は、全ての生徒が参加できるようにと、教師が、本校の一年生の実態にあわせてつくった「旅に出よう」である。この教材では、誰でもできる「旅の物語」を語る場面を取り入れ、生徒一人ひとりがを主体的に学習に参加させようとした。

教材「旅に出よう」

旅にでよう

〔伴奏の選択肢〕

旅の物語

〔発表の仕方〕

私（たち）の物語は（ ）です。速度は（ ）ぐらいです。伴奏は（ ）番を選び、（ ）に歌ってください。

※くりかえしのときは〔 〕だけ生徒につくらせます。〔 〕のないところは、はじめと同じ歌詞を歌います。

・ 教材の分析の仕方

ここでは、選択した教材の魅力を実習生に感得させ、生徒に教えたくてたまらないよう

にさせたい。教材の魅力を感じとることが良い授業の土台であり、エネルギーとなる。事前実習では、教材研究の大切さとその方法を教えたい。

まず、教材に選んだ「赤とんぼ」「小さな木の実」「荒城の月」「浜辺の歌」「帰れソレントへ」「水の戯れ」の6つの教材からどんな魅力を感じるかを、「『赤とんぼ』からどんな魅力を感じとることができるの。」「『荒城の月』で、教えたくてたまらないことがあるかな。それは何?」などと問いかけながら、まず、考えさせる。

そして、実習生の教材解釈の力を知り、その状態に応じて、楽曲を分析してみせたり、歌詞を実際にどのように味わっていくか、その方法を、実際にやってみせるのである。

本年度は、『帰れソレントへ』を取り上げ、形式、リズムフレーズの繰り返しと旋律線の動き、歌詞の味わい方など、様々な角度から曲を分析してみた。

## ② 曲の魅力を感じとらせる

実習生にとって、教育実習までの3カ月弱は、資料を調べたり、教材について考えたりできる重要な期間である。なぜならば、教材を分析し、自分なりに教材の良さや特性を考え、形式や旋律の魅力などが、様々な角度からとらえられるようになるには時間がかかるからである。

しかし、10月1日、彼女達の課題への取り組みは十分ではなかった。そこで、10月4日まで、資料を収集させたり、楽曲を分析させたりしながら、曲の魅力を探求させ、教材観を書かせた。

それは、実習生自身が教材を好きになり、教えたくてしかたがないほど曲の魅力を感じとることが、意欲的に授業に取り組みたいというエネルギーにつながるなど、少しでも良い授業をさせるための、第一の条件であると考えからである。

T先生は「帰れソレントへ」を分析し、次のような教材への思いをもってきた。

### 3年生「帰れソレントへ」教材観

この曲は、8小節ずつ4つの部分に分けられ、最初の3つの部分のリズム音型は、ほぼ同じ形式で2小節ずつa-a'-a-a'に細分化され、2番目のaから3番目のaにかけて盛り上がっていき、a'のリタルダンドで、その部分の小休止となる。これが3回繰り返された後、最後の部分がいきなりfとフェルマータではじまり、最後の4小節のF-A s-C-E sという上昇音型が、曲の山場を形作っている。日本語に訳された歌詞は「帰れソレントへ帰れよ」ではあるが原詩をそのまま日本語に訳すと「ソレントへ帰っておいで、私を生きのびさせておくれ!」という意味になり、「きみ」が帰ってくるのを切に願う「われ」の気持ちが、この4小節の中に歌われている。最初の3つの部分のうちの2つの部分はソレントの美しい景観を表している。美しい海、オレンジの花の香り・・視覚、嗅覚に訴えかける詩である。この部分は、詩のもつ意味をじっくり味わわせ、詩の表す風景をイメージさせながら歌わせる。その中に「きみ」への思いがこめられた描写であるが、この部分は、風景描写とはまた違った感じで歌わせたい。なぜなら、この部分がこの詩の一番訴えたい部分、「帰れソレントへ・・・」の部分へとつながっていくからである。

ここでは、調べたり、考えたりしたことによって生じた実習生の進歩を認めるとともに、

調べて文章にただで理解しているつもりになっている箇所や曲の本質的な見方のできていない箇所を指摘したり、良くなったところを次のように具体的にほめたりした。そして、曲の魅力について再度考えさせた。

「初めて、曲の魅力について質問したときより、進歩しているね。よく調べたし、部分的ではあるが、この曲に対する思い入れも感じられます。」

「この曲の分析から何を魅力と感じましたか。曲の特徴が、魅力にどのように結びつくのか考えてごらん。」「何を教えたいのか、どのように生徒に教えていくのかをもう一度自分自身に問いかけ、この曲が教えたくてしかたがないという状況になるまで、もう一度資料を読んだり、曲を分析したり、実際に歌ってみたり、CDを鑑賞したり、歌詞を調べたりして下さい。教えたいものができる、方法はおのずとついてくるもんだ。」

この段階では、次の3つの事項に留意させたい。

- ・ 作品を分析し、作品の魅力をさぐることにより、教えたいものをもつ
- ・ 資料を収集し、作品の背景を知ることにより、教材を身近に感じるとともに、生徒への働きかけのネタを発見する
- ・ 教材の魅力の文章化により、作品に対する自分の認識を確かなものにする

## 2 生徒への働きかけを構想する

### (1) 目標を決め、指導計画を生徒の実態をもとに決める

#### ・ 目標を決定する

教えたいことがはっきりしてきたら、生徒の顔を思い浮かべ単元を構成する。しかし、実習生は生徒の実態が把握できないので、まず、目標と指導計画を立てさせ、アドバイスをしながら目標と指導計画を決め、すぐに本時案づくりに入らせる。目標をつくるにあたっては、自分の指導したいことを、的確な文章で表現できない実習生が多い。そこで、実習生の書いてきた目標に次のようにかかわりながら、教材の提示の仕方、生徒への働きかけなど、授業に対するイメージをふくらませ、実習生自身の考えを整理させることが必要となる。

「『イタリア人のように歌わせる』とあるが、イタリア人って、一般的にはどのような国民性をもっているの。それは、なぜそう言えるの。」「『歌詞の雰囲気表情豊かに歌う』とあるが、君は具体的にはこの歌詞はどのような雰囲気をもっているの。それを表情豊かにと言うけど、どんな表情をつけたいの、具体的にどこをどのようにできればこの曲は表情豊かに歌ったと言えるの。だったらそのように書くほうがいいね。美しいとか豊かとか抽象的な表現はさげよう。・・・。」

また、「主語と述語があっているか」「レベルの違う言葉が並列に並べられていないか」「同じことを重複して書いていないか」など、文章の基本的な書き方を目標をつくる過程で指導する。これは、比較的短文の目標を考える段階で、思いつきを書けばよいのではなく、自分の考えを構成して、読む人にわかるように書けるように指導したいと考えるからであ

る。また、最初から取り組むことによって、実習中に少しでも身につけてほしいと願うからであり、それが長い教員生活に役立つと考えるからである。

M実習生が「帰れソレントへ」について書いてきた目標は、次のように変わってきた。

- ① 感情の起伏が激しく、歌うことの好きなイタリア人のように、感情を込めて劇的に歌うことができる。
- ② 同じリズムフレーズが繰り返し使用されている中で、旋律の変化に富んでいるこの曲を、rit.、∧、強弱記号を効果的にいかして、歌唱表現できる。
- ③ 何度も繰り返されるリズムフレーズによって、どんどんこみあげてくる恋人への思い、返ってきてほしいと願う気持ちを表現できるようになる。

・ 指導計画を立てる

目標を決めることと同時進行して、教えたいことを「どのような順番で」「どのように」生徒に働きかけていくか、言いかえれば、教材に切り込むストーリー・単元を、構想しなければならない。

実習生には、単元名「滝廉太郎の歌曲の魅力」主教材「花」を例（単元構想表図1）として一応説明をした。しかし、まだ、授業をしていない段階なので、総時間何時間、何時間目に何を教えるといった簡単な指導計画を、教官と相談しながら、たてさせておく。

図1 単元構成表

	学 習 内 容	主 眼	教 師 の 対 応
1	「花」の概括的練習と歌詞の意味	・「花」の歌詞を調べたり、鑑賞したり、彼の他の作品を歌ったりすることにより、滝廉太郎と彼の作品に興味をもつことができる。	・『「花」が90年も愛唱されている秘密をさぐろう』という単元を通した課題をもとに、作品のイメージと学習の仕方を考えさせ、発表させる。
2	「花」の2部合唱	・バランスの良いハーモニーで2部合唱を楽しむことができる。	・班競争を取り入れながら、各班にアルトのパートを暗唱させる。
3	「花」の魅力の追究	・同時代の他の作品と比較したり、好きな箇所を理由とともに発表したりする体験を通して、「花」の魅力を感じることができる。	・「みなと」「菜の花」など同時代の作品の楽譜を提示する。 ・マグネットつき名札で黒板に好きな箇所を表示させる。 ・個人で考えさせ、班で意見を交換させ、発表させる。

② 本時の主眼と指導過程をつくる

・ 主眼を決定する

指導計画、単元構成ができたら、実際の授業に向けて1時間の授業を構想させる。最初、目標をもとにして主眼を考えさせる。ここで、実習生に、目標と主眼の性格の違いを教えなければならない。

T実習生は、「帰れソレントへ」を2時間で指導することに決めた。そして、1時間目の主眼を次のように立ててきた。

○ いろいろな曲の特徴を感じとって、表情豊かに歌える

実習生に、次のように問いかけながら、主眼の文章の意味を、もう一度考えさせた。「いろいろな曲の特徴の意味？それともこの曲のいろいろな特徴？」「この時間を感じとってほしい特徴は何？」「転調を感じとってほしいわけだね。転調を表情豊かに歌うというけど、どのように歌えばいいのかな？ここが一番難しいところだぞ。良く考えて。例えば、声の質を深い声にするの。明るい声にしたり変えるの？それとも、フレーズ感をクレッシェンド・デクレッシェンドで表そうとするの？歌詞の意味を言葉の抑揚に気をつけ、雰囲気につけながら表すの？」

そして、「主眼は、この時間の目標を達成するにはどのようにしたらいいかを、具体的に書くものです。」と、主眼と目標の性格の違いを次のような例をあげて説明した。

「例えば、豊かなハーモニーで3部合唱ができるという目標を達成するために、・まっすぐな声を出すこと、・声部のバランスをとること、・各声部が正確な音程で歌えることなど、具体的な方法を書くのが主眼だ。この場合、転調を具体的には何で表したいの。」

T実習生の主眼は次のようになった。

曲の途中での転調を感じとり、それを声の質を変えて表すことができる。

主眼を立てるときの留意点をまとめると次のようになる。

- @ 目標と主眼を区別する
- @ 主眼は、具体的で、評価できるレベルにする。
- @ 内容面と情意面の2つの主眼を立てる。

・ 生徒にどのように働きかけるか、発問を構想する

いくら価値ある教材であり、優れた生徒であっても、それを引き出し、伸ばす教師の働きかけがなければ意味ある音楽活動にはならない。

教師は、「教えたい」「語りたい」ものをもたねばならない。しかし、それを教えるはならない。子どもたちの「学びたい」ものになるように呼びかけなければならないのである。そこに、発問づくりの使命がある。子どもたちの身（心）にかかる具体的な発問が設定されているかどうか、指導案づくりのきめてになる。

吉本均氏は『授業の原則』の中で、このように述べられている。つまり、教材解釈によって教えたいものにした教材を、生徒の「学びたい」ものに、どのような順序で展開する

か、発問を、指導案によって構想するのである。

歌の上手な教師なら「先生が歌うから聴いてくれるかな。」と語りかけ歌うことによって、生徒を魅了し、「ぼくも、あのように歌いたい。」と、一瞬のうちに、生徒に教材を学びたいという気持ちにさせる方法もある。「この曲の雰囲気にはどちらの演奏がふさわしいかな。〇やritやa tempoをよく聴いてごらん。」などと、限定して問いかけ、生徒が何をしたらよいかわかるようにして、様々な方法で表情豊かに生徒に語りかけ、生徒が授業に参加したいという気持ちを起こさせる方法もある。

- ・ 生徒の反応を予想しながら、最も効率よく働きかける

生徒の追究したいという意欲を呼び起こすには、生徒の顔を思い浮かべながら、生徒の実態に即した発問を構想しなければならない。例えば、「どのように働きかけたら、一番授業に食いついてくるか。」「誰が一番意欲的に歌うか。フレーズ感を感じて歌うことができるのは誰と誰か。誰を模範唱させようか。誰と誰がこの働きかけではのってこないか、のってきたら進歩をほめよう。のってこなかったら、どのように対応しようか。」などと、生徒の顔を思い浮かべながら発問を構想していくのである。

T実習生は、3時間目の授業の指導過程の最初の部分を生徒の反応を予想し、次のように書いてきた。

	学習内容	教師の働きかけ	予想される生徒の反応	教師の対応
導 入	発声練習	・ドレミファソラシド」を「ア」で歌う。 ・ドミソミド」を「ア」のスタッカートで歌う。 ・「ドミソ」のパートに分かれて重唱する。	・するもしない子もいる ・する子もいるが声を出しているだけで、歌おうとしていない。 ・けっこうみんなうまくいく。	・姿勢やどの開け方や声の支え方についてのイメージを教える。

ここでは、次のように指導案の構想の仕方、書き方を説明した。

「この曲をたっぷりした豊かな声で歌わせたいから発声練習を取り入れたのだね。発声練習をさせるなどというのではないが、ただ、発声練習をしようと言ってやったのでは、ほとんどの生徒は、真剣に取り組まないと思います。どのように働きかけたら自分の願うような活動を生徒がするかを真剣に考えねば。」「例えば、『帰れソレントへの良さを君達と是非体験したい。そのためには、明るく遠くまでとどく声が必要だ。発声練習をしよう。』と生徒に訴えて、発声練習をさせたら、予想される生徒の反応も変わってくるだろう。」目いっぱい働きかけて、生徒の反応を予想する。進歩すれば進歩を肯定的に評価してやる。そうすれば、生徒は良くなる。うまくいかないと予想される箇所は方法を考える。例えば、よく観察して、取り出し、繰り返し指導するなどの手を打つこともできるぞ。」

また、指導者として、教師は、生徒に、《今、何に向かって、何をしているのかを》を明確にしてやり、そして、《その過程と結果を》を認めてやり、《次の課題に生徒が喜々として取り組むように方向づけてやる》ことがいかに大切かを教えたい。

- ・ 学習活動と呼び起こし、方向づけ、組織してゆく教師の発問の説明をする



生徒の学習活動呼び起こし、方向づけ、組織していく教師の発問は、次のようなものであると言われている。このことについても実習生に説明しておきたい。

#### ア 限定性のある発問

内容を離れた観念的な思いや感想にならないように発問を焦点化することであり、一点に限定して問いかける。

例えば、「『さくらさくら』の歌詞の意味を考えなさい。どんな情景がイメージできますか。」と漠然と問うのではなく、「匂いがない桜が『匂いぞいづる』と書かれている。桜が匂うとはどんな状態だろうか。」と、具体的に問う。

#### イ 思考の流動性を引き出す発問

一つの問いに一つの答しか返ってこないような問いではなく、その答がどのようにして生まれたのか、答を導き出すためにどのように考えたのか、などを導き出す問いである。

例えば、「『花』が同じ時代にできた作品に比べ、いかに優れているかを、『菜の花』や『みなと』と比較し、例をあげて説明しなさい。」などと、『花』が同じ時代の作品に比較して様々な点で優れていることを答えられるように問うのである。

#### ウ 未知と既知の間を問う発問

わかっていることとまだわかっていないことを明確にし、その間を問う発問である。前述の「さくらさくら」を例にとると、小学校で学習し、もう知っていると思っている生徒に、「歌詞の良さは理解していなかった。」など、未知の部分を示すことでやる気を起こさせる発問でもある。

#### エ 対立・分化を引き起こす発問

一つの答に固定化するのではなく、生徒の受けとめ方やわかり方の相違点をめぐって議論がなされるように問いかける。

例えば、「赤とんぼ」の一番の歌詞では、「赤とんぼ」を追いかけっていると答える生徒と背中に背負われているという生徒に意見がわかるように発問し、生徒に立場をとらせて議論させることにより、一番の歌詞を本気で考えさせ、深く理解させようとするようなことである。

- ・ 選択肢を設けたり、活動の場を設定したりすることで、活発な活動を呼び起こす

アジアの音楽では、韓国、タイ、インド、ネパールなど、学習したい国ごとに選択肢を設け、国別に班をつくって課題学習をさせた。生徒の学習の自由度を広げることは、生徒の学習への意欲を向上させる。また、「運命」のイメージでベートーベンの似顔絵やプロフィールを学習プリントに位置づけ書かせることなども、ベートーベンや彼の作品や作品の背景などを調べることにともな、ベートーベンに親しみをもたせることにつながり、授業に積極的に取り組もうというエネルギーになってゆく。

### 3 授業展開における教師の働きかけ

授業設計の段階でいかに緻密に構想を練っても、教師の予想を越えた反応がでてくる。こうした反応に対して、教師はその場その場に依じて、個人あるいは班として立場をとらせたり、時には教師が特定の立場に立ったりして、ゆさぶりをかけたり、からませたりしながら、学習活動を活発にし、学習を確かなものにしていかなければならない。生徒の様々な反応に対応し、授業展開をすばやく組織し、方向づける教師の働きかけを、次の視点

で行いたい。

実習生には本校の著書『「授業のヤマ場」の構想と展開』をもとに、次の事項を説明する。

- ・ 答にからみ、答から始まる

生徒から出てくる意見や表現が、予想した曲想もしくは正答に近いものであっても、そこで終わるのではなく、そこから始まるように方向づけていく。「なぜ」「そのわけは」「どこから」など、根拠や出所などを問いただして方向づけていくのである。

しかし、実習生は、求める答えになるまで、「他に意見はないか？」と聞くのが現実である。自分の意見が正確に表現できない生徒も多いことを教え、生徒一人ひとりが出した意見の意味を考え、「どうしてそのように考えたの。」「どこで、そう思ったの。」などとたずねながら、その意見を取り上げ板書するなど一人ひとりの生徒を尊重することを教えたい。時間が許せば、「〇〇君の発言について意見はないか。」と取り上げることが学級全体の認識を深めることにつながることも教えておきたい。「答えを求める授業」から「答えを認め、かかわり合う授業」をめざさせたい。

- ・ つまずきを拾って深める

生徒のつまずきを生徒の前に出して、対立点を明確にしたり、その原因をたどっていきながら、一層深く対象を理解させていくための対応が、つまずきを契機としてなされるように心がけなければならない。

- ・ 対立点を明確にする

生徒のいろいろな受けとり方や曲想のつけ方に対して、対立点を明確にしたり、「わかる」生徒の意見に「わからない」生徒の意見をからませることによって、より深く理解させることができる。

教師は教材解釈に基づいて、話し合いの中で、まとまったこと、まだ対立していることは何かを明確にし、生徒に提示しなければならない。

- ・ 班におろして広げる

班で話し合う内容についての目標が明確にされ、その課題に向かって生徒が思考を開始するところまで具体的に問いかけていって班におろす。

- ・ 接続語でかかわり合わせる

「〇〇君と同じですが」「〇〇さんにつけ加えます」など、集団を意識した発表・説得的な発表、他の生徒を問いただす発表が、生徒同士で行われるように授業展開を組織し、方向づけることが大切である。

こうしたかかわり合いは、教師が正答にからんだり、ゆさぶったり、対立をきわだ立たせることによって、次第に生徒に定着させていくことができる。

- ・ 生徒の意見で授業を進める

「今から黒板に書く事項は、君達が「水の戯れ」の第1主題は水がどのような状態かを、プリントに書いてきたものをまとめたものです。どのイメージが君達に一番ふさわしいか、

もう一度聴いてみよう。」などと、M教生が授業でおこなったように、生徒の意見を大切に  
する授業を構想することが生徒を授業に主体的に立ち向かわせる手段である。生徒の生  
活に密着した資料や話題を提示することも、有効な手段である。

#### 4 教育実習生に指導しておきたい10項目

実習期間中に感じた、実習生に指導しておきたいことは次の通りである。

##### (1) 教室環境に目を向けさせる

実際の授業を始めるにあたって、最初、実習生に指導すべきことは、教室の環境に目を  
向けさせることである。「教室は暗くないか。」「机の位置はその日の授業に生徒が参加  
できるように並べられているか。」「落ちついた雰囲気ですぐに生徒が迎えられるようになって  
いるか。」など、授業前に、様々なことに目を配ることが、よい授業を生むコツである。  
特に、生徒を掌握することが難しい実習生には、自分の近くに椅子を整然と並べさせるこ  
とが、生徒を掌握すること、活発な授業をすることにつながるのので教えておきたい。

##### (2) 授業と遊び時間のけじめをつける

実習生に必ず指導したいことの一つは、教師と生徒も、お互いにかんばろうという気持  
ちで、「お願いします。」と、大きな声で挨拶できることの大切さである、挨拶の後には、  
遊び時間の名残をとどめず、教室全体が授業に打ち込もうとする雰囲気になるようにさせ  
ることである。

「気をつけ」の号令のとき、全ての生徒が教師の顔を見つめるのを静かにまって、礼の  
号令をかける合図をおくることができ、挨拶のあとの教師の言葉と「歌う」「鑑賞する」  
などの動作まで、リズム良く集中して進めば、授業は半ば成功したといってよい。

授業の始まる前に教師がピアノを弾きながら生徒を待ったりすることの生徒への影響の  
大きさや授業前・授業の後の生徒との語らいの大切さも、実習生に語って聞かせたい。

##### (3) メリハリのある授業展開をさせる

実習生の実施する授業の多くは、「メリハリがない」「リズム感がない」ように感じら  
れる。音楽と同様に、メリハリがきいてリズムに乗った授業は楽しく、生徒もいつの間  
にか力を発揮するものがある。メリハリのある授業をさせるために、次のようなことに気をつ  
けるよう指導したい。

- ・ 学級全体40人全員に理解させ、40人を動かそうと、全体を意識し見ながら語りかける。
- ・ 指示は短く、一回に一つのことを
- ・ 立つ、座る、班をつくる、ステージで歌う、鑑賞するなど、生徒が動作を起こすとき、  
それぞれの動作はもちろん、動作と動作のつなぎ目にも理想のイメージをもち、そのイ  
メージになるように普段から働きかける。例えば、「ステージから席に静かに早くつけ  
た。〇〇君や△△さんなどは、黙って、すぐに先生の顔を見ていたね。」と働きかけて  
おきたい。

その他、次のことにも気を配りたい。

- ・ 生徒が主となる場と教師が主になる場の場分けをする。
- ・ 無駄な話や時間つなぎの話は授業の緊張感を損なうからしない。

#### (4) 音楽性を追究させることで生徒を鍛える

実習生が最も多く発する言葉は、「もっと大きな声で歌って。」「大きな声で歌えて良かった。」であった。実習生には、「音楽性を要求すれば、必然的に大きな声も出る。生徒がイメージをふくらませ、表現しようとするれば、技術に目覚める。歌詞、旋律、雰囲気、また、教師が語る曲の背景や資料、もちろん、素敵な演奏もだが、音楽の一時間の学習が、一人ひとりの生徒に意味があり、将来、学習した曲が愛唱されるなど生活にいきることを考えてほしい。質の高い演奏を目指すことは簡単で、教師にとって面白いが、技術主義におちいると、多くの生徒を音楽嫌いにさせる。」と、語って聞かせたい。

教師が生徒のイメージをわかりやすく曲想として提示したとき、生徒は、歌詞や旋律などに共感し、曲に対するイメージをふくらませて、自ら表情豊かに歌おうとするのである。

- \* 「答を求める授業をしてはならない。」
- \* 「良い演奏だけを求める授業をしてはならない。技術主義に走ると音楽嫌いな生徒をつくってしまう。」
- \* 「1時間の授業は音通りの段階も、説明のときも含めて、全て音楽的であれ。」

#### (5) 生徒の自尊心をゆさぶり、生き生きと活動させる

実習生は、「階名で歌おう。」「『水の戯れ』をかけます。静かに聞いて下さい。」などと、ただ機会的に行動を指示するので、生き生きした活動は生まれてこない。

「君たちなら、この曲が3回で歌える。やっごらん。」「お！ほとんどできている。さすが、2年2組だ。2度目のできるぞ。すごいクラスだ。」などと、生徒の自尊心をくすぐりながら、授業に積極的に参加させるように指導させることが大切である。

機械的な反復練習も、だらだらならないように、わかりやすく具体的な目標を掲げ、肯定的評価を加え、自尊心をくすぐりながらてきぱきと取り組ませたい。

#### (6) 提示の仕方を工夫し、生き生きと活動させる

『水の戯れ』で、実習生は、全体を通して鑑賞するだけでなく、提示部と再現部の第1主題の一部を録音し、比較させながら聴かせて、その違いを鑑賞させた。このことによって、生徒は何をすればよいか具体的にわかり、授業に積極的に参加し、形式に対する理解や音楽の雰囲気の違いがわかってきた。このように、時間とともに消える音楽を生徒が主体的に考えたり、感じたりできるように工夫することが、生徒を生き生きと活動させる有効な手段になる。

教師は、授業で表現や鑑賞をすることの意味や学級で鑑賞することの意味など、授業で何を学習するかを、生徒の生きざまにかかわって、平素から語りかけておきたい。なぜならば、なぜ、授業で音楽を学習するのかを生徒がわかることが、教師の様々な働きかけを受けとめ、教師の様々な働きかけを生かすことにつながっていくと考えるからである。

#### (7) 音楽内容にかかわる教師の技量を身につけさせる

音楽の教師として、一番むずかしくやりのある場合は、合唱や合奏を指揮しながら、生徒の力では行き詰まっている演奏を生徒が驚くほど豊かに短時間で変えるときであろう。

「どこがよくて、どこが問題なのか」「時間内で演奏を変えていくにはどこを重点的に指導すればよいか」など、教師は、演奏を的確に診断し、技術的に分かりやすく的確な指導ができるようにならなければならない。これには特効薬はない。長い年月の教材解釈の積み重ね、演奏を能率よく質の高いものにしようとする普段からの努力と実践が教師の技量を向上させるのである。実習生には技量の大切さと研修の大切さを強調したい。

その他、音楽の内容にかかわる技量には次のようなものがある。

- ・ 音楽的イメージをわかりやすい言葉で生徒に伝えることができる。例えば、「遠くに声をとばすように歌ってごらん。」といて、歌わせることなどである。
- ・ 演奏の仕方をわかりやすい技術で具体的に説明できる。例えば、「こめかみをあけて、すうように歌ってごらん。」といて歌わせることなどである。
- ・ 合唱の面白さは、全員が同じことを考え、同じ表情をつけると、肉声を使うこととあいまって、人の心をとらえることができるということや合唱する生徒自身も歌う楽しさを味わい、また、仲間と共感し、共通の感動体験ができることなどであろう。合唱曲で教師が習得しなければならない技術は数限りなくある。例えば、混声3部・4部合唱の美しい響きを出させること一つをとっても、まっすくな声で歌わせる、各声部のバランスを考える、他の声部を聴きながら正しい音程で歌えるなどがある。その他、言葉の抑揚、主旋律と他の声部のバランス、腹式呼吸や発声の仕方など、その場その場に応じてあらゆる音楽的な技術を駆使して生徒がイメージする曲想を実現してやらなければならない。いや、生徒の予想をはるかに越えるようにしなければならない。
- ・ 生徒の合唱や合奏を指導するのに指揮は効果的な手段である。指揮する場、姿勢、脱力、たたき、平均運動など指揮法の基本的なことについて、実習生に指導しておきたい。実習期間中一度か二度は体験させておきたい。
- ・ 教師や生徒による模範演奏・歌唱・朗読は、作品への親しみや理解を深めるとともに、演奏や朗読する人の個性や音楽性を感じとらせることができるなど、効果が大きい。教師の模範奏・模範唱は、必ずしも上手でなくても良い。特徴をとらえてオーバーにわかりやすくしたい。
- ・ 拍子、調、リズム、音階（長調・短調・日本の音階）など、基本的な音楽用語の意味を、辞書で調べさせたり、考えさせたりしながら、納得し、生徒に説明できるようにさせたい。

特に、音名と階名の区別、移動ド唱法と固定ド唱法の区別、中学校で移動ド唱法で歌う理由については、じっくり考えさせた上で、指導する必要がある。なぜなら、長調の意味（調性の意味）や音名と階名の区別が納得いくようにわかっていないために、調性について、生徒にわかるように説明できない実習生が多いからである。

- ・ 中学生の声の音域とその記譜法についても、実際の授業の中で指導してゆきたい。特に、女性の実習生は、男子の声の音域と記譜法についての理解が十分でなく、オクターブ下の声で歌わせておいて、声はどうして出ないの、と文句を言うことが多々ある。

### (9) 伴奏の技術を習得させる

伴奏は、教師の気持ちを生徒に伝える一番自然で有効な方法である。なぜなら、黙って伴奏を弾くことによってさえ教師の伝えたいことの大部分は生徒に伝えることができるからである。実習生の中には、歌やリコーダーが終わると後奏を止めてしまう者がいるが、前奏が始まると同時に音楽は始まり、後奏が終わり指揮者が手を降ろすかまたは余韻がな

くなるまで一つの作品だということを、生徒ともども、繰り返し指導したい。

その他、次のようなことを指導したい。

- ・ 譜読みの段階から音楽的になるように気をつけさせる。ピアノで旋律を弾きながら音取りをするよりは、肉声で歌ってきかせる方がよい。無味乾燥的な機械的な訓練はさける。
- ・ 伴奏は主役ではない。演奏を支える気持ちで。大きすぎないように。
- ・ 学級の生徒数40人を意識し、それをバスラインや和音で厚く支えるような気持ちで。
- ・ 拍子が間のびすると歌いにくい。拍を意識した伴奏に心がけさせる。特に左手。
- ・ リタルダンドなど、テンポを少しずつ変えるときは、最小の音符を頭の中で刻みながら、自然に。

#### ⑨ 授業を活性化させる技術を習得させる

「答から読み、答から始まる」「接続語でかかわりあわせる」については前述した通りである。ここでは、実習生に指導した授業を展開する上ですぐに役立つ技術を列挙する。

- ・ 個人で調べさせたり、考えさせたり、作業をさせたり、話し合いをさせるときは、時間と、目標と、手順を具体的にはっきりさせてやる。
- ・ 全体で話し合いをする前に、個人学習を取り入れ、個人の意見や考えをもたせる。
- ・ 指示したことは、その通りやっているかどうかを確実に見かじめ、必ず、評価する。
- ・ 巡視しながら、一人ひとりにかかわり、認めたり、サジェストしたりする。また、巡視で見つけた生徒の意見や考えを次の授業展開に生かす。
- ・ 生徒にわかりやすく説明するには、板書をしたり、OHP・ビデオ・レーザーディスクなどの視聴覚機器を使用したりすると効果的である。特に、板書は生徒の発言を值うちづけたり、授業の構造を一目でわからせることができる簡単で有効な手段である。板書の方法については特に指導しておきたい。
- ・ 教師の位置も授業を展開する上で、働きかけを有効に機能させる一つの有効な手段である。実習生の中には一時間中ピアノのところから動かない者も多い。どこで、語りかければ効果的に自分の考えが伝わるか、働きかける場を演出させたい。
- ・ ノートや学習プリントの使い方も学習を深化させ、授業に主体的に参加させる大切な要素である。生徒の理解状況に応じて、記入する時期と時間を決めさせたい。

#### ⑩ 評価を授業に生かす

評価は、生徒のよさや能力などを本人に知らせたり、自分のよさや能力などを自分の力で知ることができるようにさせたりすることで、将来に希望をもたせるものである。評価を生徒に希望をもたせ、自己実現への意欲をもたせる手段として、その大切さを教えたい。また、自己評価、教師による評価、生徒が相互にする評価があることも教えておきたい。

実習生には、「自分が働きかけたことについて評価しなさい。」と、繰り返し指導した。

例えば、『小さな木の実』や『赤とんぼ』の歌詞の情景をイメージさせた後、「歌詞の情景を思い浮かべながら歌って下さい。」と実習生が働きかける。すると、生徒は、母音を暗く少しゆっくりめに小さな声で歌う。ここで、「君達は少し暗くゆっくりと寂しそうに歌っているね。」「今までの歌い方と違って情景が目浮かぶようだ。」と肯定的に評価してやり、「40人が歌うにしては声量がたりないかな。今までと同じ声量で声の質や言葉の言い方などに気をつけて歌えればもっともっと君達のイメージがでてくると思うぞ。」

もう一度やっごらん。」と働きかけたい。

しかし、実習生に「声が小さいですね。このように、明るくのびのびと歌って下さい。」と言って、母音を明るく大きな声で範唱し、歌唱練習させてしまうのである。

ここでは、「生徒は、実習生の働きかけを理解し、働きかけに応じて歌ってくれているのだ」「自分の働きかけが生徒にどのように理解されているかを評価しなければならない」と、必ず、指導したい。また、演奏から生徒のイメージや思いや考えを感じとってやれる力を養う必要性について語ってきかせたい。

その他、次のことを指導することの大切さを感じた。

- ・ あたかも自分一人のために授業が行われていると思わせるように情感を込めてほめる。教師は伴奏したり、歌ったりしながら、良いところは○とか、goodとかすかさず評価したい。本当に大切なところが何人かでもできていたら、すかさず演奏を止めて、こんなところができている人がいると評価し、その箇所を印象づけ、さらに、できるようにしたい。できないときも、その箇所を取り上げ、なぜ演奏を止めたか、そこがいかにか大切かを説明してわからせ、適切な技術を教えながら取り組ませ、進歩したらその進歩を認めてやる。
- ・ 教師は生徒の言動や演奏の意味を理解し、それを、値うちづける技術をもたなければならない。
- ・ 個人内で優れた点を評価する。個人または全体で進歩したことを見つけて評価する。
- ・ 自己評価や生徒相互の相互評価を授業展開の中に組み込ませる。

実習生には評価活動はむずかしい。授業構想の段階で、男女、班、個人などできるだけ生徒の顔を思い浮かべさせ、その活動を予想させたい。そのことが、授業展開場面での適切な評価につながる。

## 5 おわりに

査定授業は正直いって、私にたくさんの課題を残した授業だった。私がこれから教師になるまでに何を身につけなければならないか、前よりも明確になってきたように思うのである。まず、今の私はきちんと評価ができるようにならなければならない。そのためには自分の音楽性をもっと磨いていかなければならない。音楽性を磨くことで、もっと、生徒がのってくる働きかけができるのではないだろうか。もちろん、生徒がのってくる働きかけができるようになるには、生徒の気持ちをつかまえることが大切であろう。

私が一ヶ月間に出会った多くの美しい合唱は、こういった働きかけの成果なのだ。自分の働きかけで生徒が変わる喜びを、少しでも多く生徒とともに味わえる教師を私はめざしたいと思う。

教育実習が終わって提出したM先生のレポートの終わりの部分である。2人の実習生とも、1カ月前と比較すると人間的にも成長し、音楽や教育に対する考え方もしっかりしてきた。また、何よりも、これから教師になるために、どのような課題が自分にあるかがわかり、それに向かっていく心構えが見られることがうれしい。

本年度は、夏休みに教材研究をさせて、それをもとに、教材の見方・考え方・生徒への働きかけ方を重点的に指導しようと考えていたが、実習生が課題をしてこなかったのでは

きなかった。教材を研究することは、経験を積んだ教師でもむずかしい。遠くても、進行状態を聞いてやり、教材研究の仕方・資料の選び方などを、夏休みに指導することが必要であったと反省する。

この紀要は、「教育実習を効果あるものにしよう」「音楽科における良い授業を成立させるものは何かを自分なりにまとめよう」という2つの願いをもって書いた。前者については、書くことによって、「来年度から、何を重点的に指導すればよいか」「どこまで教育実習で指導できるか」など、全体を構想することができるようになった。後者については、1993年度教育実習を中心に1992年度の記録も参考にして書いたものなので、実践が歌唱教材にかたよってしまった。授業展開時における教師の働きかけは、もっと具体的に事例をいれて詳しく書く必要があることを反省している。授業展開時の教師の働きかけ、教師の技術については、今後、実践研究を続けていきたい。

最後になるが、この実践を通して、教師は、「自分の夢や願いをもち続け、いつも生徒に語り、訴え続けなければならない」と感じた。

また、「教師の人間性を豊かにすることが大切だ」「人間としての様々な魅力が生徒を引きつける」「様々なことに本気で取り組むことによってこそ、よい教師になれる」とも、感じた。

音楽を愛し、生徒を愛し、生徒の音楽性と自分を信じて今後の授業実践に励みたい。

#### 参考文献

「個性が伸びる」評価活動の工夫	山口大学教育学部附属光中学校1993年紀要 3 2	
「授業のヤマ場」の構想と展開	山口大学教育学部附属光中学校	以上中村印刷
授業をつくる教授学キーワード	吉本均	明治図書
授業の原則「呼応のドラマ」をつくる	吉本均	明治図書
続授業成立入門「呼びかける指導案の構想	吉本均	明治図書
全員参加のわかり合う授業の創造	桑原昭徳	周東町教育委員会
中学校指導書音楽編	文部省	教育芸術社